第４章　公立図書館の現場訪問

１　ルイシャム（Lewisham）区の公立図書館
－　現在の公立図書館が指向しているもの　－

ルイシャム区は人口約24万人、ロンドン33区の一つである。芸術と図書館サービスは区のレジャーサービス部が担当している。区内にはレファレンス図書館、14の分館、移動図書館１台そして地域歴史センターがある。同部では、外出できない人のためのハウスバウンドサービス（図書宅配）を行っており、またダウンハム(Downham) とウエーブレンクス(Wavelengths) の２つの図書館では、オプンラーニングも実施されている雇用・資源センターを併設している。これらの図書館は規模としては比較的小さいが、他のロンドンの区に比べて比較的安価な料金でサービスを行っている。1993-94年の図書館サービスに対する人口１人当りの支出額（見積）は、ロンドンの平均が20.16ポンド（約3,200円）なのに対し、ルイシャム区は17.70ポンド（約2,800円）である。

○図書館移転計画

この４年の間に区内の５つの図書館が閉鎖され、それに代わって４つの新しい図書館がオープンした。その結果、利用者が大幅に増加した。この計画は厳しい予算状況のなかで行われ、収入の大部分は元の図書館の建物を売却することで賄われた。1990年に行われたブラックヒース(Blackheath)図書館の移転が最初の計画の実行であった。図書館は街の中心部から少しはずれた村から、国鉄の駅の近くの商店街の中に移され、利用者数が倍増した。同様の現象が、1991年にキャットフォード(Catford) 図書館が区の新庁舎の１階に移転してきたときにも起こった。ここで注目したいのは、このような効果が単に移転したことによって発生したということである。すべてのケースのついて言えることは、19世紀の建物で不便な場所にある図書館よりも、便利な場所にあり近代的な図書館のほうが魅力的であるということである。

1992年にはウエーブレンクス図書館が古い２つの図書館に代わって建てられた。ここには図書館ばかりではなくプールが併設されており、住民に人気がある。特に、今まであまり図書館に縁がなかった若い人達が多く来館するようになった。1994年には、ルイシャム区の中央レファレンス図書館がショッピング街にオープンした。ルイシャム区ではこの新図書館の開館に大変期待している。このための予算は260万ポンド（約４億２千万円）であるが、クロイドン区(Croydon) やブロムリー区(Bromley) などの開発計画に比べれば、かなりの低コストである。

○管理システムの見直し

この２～３年に図書館の運営管理システムも急激に変化しつつある。1989年以前には図書館の管轄部局であるレジャーサービス部に、17の図書館をそれぞれ監督する司書が従事していた。これによって司書は自分の担当する図書館を熟知できたが、人件費が高く、また、サービスについて評価することが難しかった。ルイシャム区は、サウスワーク(Southwark) 、グリニッジ(Greenwich) 、ベクスリー(Bexley)、ブロムリー(Bromley) などのロンドンの他の区と共同で業績評価指標（Performance Indicators) を作成し、それを基にしたサービスを提供しようとしている。指標には開館時間や１人１時間当たりの貸出数、支出、貸出に対する蔵書数、職員のコストと来館者の数などを含め、これらを利用して図書館の効率的運営を図ろうとするものである。その結果、例えば、今まで１つの図書館に１人の担当司書だったシステムが、区内の図書館を西部、中央、東部の３つのグループ（５～６）に分け、それぞれに統括の司書が一人つくシステムに変わった。これにより人件費が安く、フレキシブルなシステムになったと部の担当者は説明してくれた。

○地域コミュニティーへのサービス

図書館の担当者によると、区の図書館にやって来る利用者で、実際に本を借りる人は約50%に過ぎないということである。区の図書館ではＣＤやカセットやビジネス情報の利用者、オープンラーニング受講者の登録に対し料金を徴収していない。この点は無料の原則を支持している図書館サービス関係者の自慢であり、特にダウンハムとウエーブレングスの２つの雇用資源センターでは、料金を課してはなかなか利用してもらえないだろうということであった。

ルイシャムは少数民族が住む割合が高く、そのため本の購入や配置に配慮がなされている。多くの図書館には黒人に関するコーナーがあり、またアジアやその他の言語で書いてある本が収集されている。幾つかの図書館ではアイルランド問題、女性問題、ゲイ・レズビアンに関するコーナーが設けてある。ルイシャム区は労働党支配の区であるが、1991年には区議会は財政難を理由に区内の３つの図書館を閉鎖しようとした。ところが図書館側が強行に反対したため公聴会が開かれ、その結果図書館の閉鎖は大変不人気な政策であるということが分かり、区議会は1993年に新しいレファレンス図書館のために275,000ポンド（約4,400万円）の補助金の交付を承認した。

○ウエーブレングス図書館　－地域のレジャー施設の一部として－

ウエーブレングス図書館は、1992年にプールなどを含む地域の複合レジャー施設の一角に建てられた。プールの維持・管理は契約によって業者に委託されているが、図書館は区

の図書館サービス部門のうちの西部地区グループによって運営されている。週の開館時間は51時間、月曜日から土曜日までは原則として9:30～17:00であるが、火曜日と木曜日は20:00まで閉館時間が延長される（日曜日は閉館）。土曜日は最も利用者が多く、平日の夜はかなり空いている。内部は、カウンター部門を中心に、書棚が周りを取り囲むように配してある。波形のユニークな日さしがガラスの屋根からの光のフィルターとなっている。

図書館には約60,000冊の本と約7,000のＣＤ・カセットテープ等が用意されている。図書目録は、OPAC（on-line public access catalogue)という名前でコンピューターにインプットしてある。本の情報のみならず地域の診療所の住所やミュージカルの日程などその他の付加価値情報も既に入力され、コンピューターによる図書館情報センター化の先進的な試みが見られる。また、アイルランド音楽のコンサート、詩の朗読会のような文化活動も行われている。

○児童図書館

児童図書館には、17,000冊を超える児童書があり、そのうち約半数がフィクションで、1992-93年には13歳未満の児童2,948人がここを訪れたということである。図書館を利用する児童の大半は、小学校の帰りに来館する。1988年まで、学校への図書サービスを担当する学校図書館サービス（School Library Service）というものがあったが、これは廃止された。今ではルイシャム区は児童図書館政策を学校図書館とは別に考えている。学校のクラスに本を大量に貸出すことが減ってきており、児童書の貸出しが昨年の5,000冊から1994年３月31日時点で、今年度は3,160冊に減ったということはこのことを端的に表している。ちなみにこの図書館には、乳幼児を預けるための施設であるクレッシュ（Creche) がある。

○特別コーナーとハウスバウンド・サービス(Housebound Service)

区では５つのグループに対する図書館サービスを重点課題と考えている。つまり、黒人、女性、高齢者、障害者そしてゲイ・レズビアンのグループである。1980年代には、彼らの必要なものが揃っているかチェックしていた２つの地域図書館があったが、これは廃止された。しかし、区はその後も特別な分野の書籍の収集は続けている。ウエーブレングス図書館では、特に女性と黒人に関係する本と国外の文献の収集に力を入れている。国外の本としてはインド、パキスタン、中国、ベトナム、日本など約300冊あり、たいへんよく利用されているということである。最近ではアイルランド関係の本も収集するようになった。どんな本を収集するかについては、住民に意見を聞いて購入の６か月前に決められる。これらの特別コーナーのための財源は図書館サービスの特別企画予算から支出されるが、それぞれのグループからの要求の度合いによって割り当てられる。今年のこの予算は中央レファレンス図書館のために支出されることになっている。

高齢者と障害者については幾つかの方法でサービスが行われる。多くの図書館では目の不自由な人達のために大文字で印刷されている本を、耳の不自由な人あるいは読み書きの出来ない人のためにカセットテープ文庫などを用意している。また図書館に自分で行けない人のためにハウスバウンド・サービスがある。昨年以来、区の３つの地域グループごとにこのサービスを組織しており、ウエーブレングス図書館は西部グループの拠点図書館になっている。1992-93年には50人だったハウスバウンド・サービスの登録者が現在約120名おり、来年には200人になると考えられている。利用者の多くはソーシャル・ワーカーの紹介によって登録している。３人の職員が２台の車（バン）を利用して登録者の家を訪問する。本は読者が喜びそうなものを選び、利用者は以前読んだ本のタイトルを職員に教える。訪問時間は大体10分ということになっているが、普段あまり話すことのないお年寄りにとっては格好の話し相手となり、なかなか時間どおりには終わらないということである。以前は病院への図書サービスもあったが、今はやってないとということであった。一つには政府のコミュニティ・ケア、NHS（ナショナルヘルスサービス）改革の影響で、病院に長くいる患者が最近では稀になったというのが理由の一つである。

最近ではノンフィクションの本が他のレジャー関係の本と一緒になるように配置されるようになった。伝統的なDewey分類から、より利用者に使いやすいような、例えば本屋のような本の配列になる傾向にある。

○雇用情報サービスとオープン・ラーニングセンター

図書館内の雇用資源センター（The Employment Resource Centre,ERC）は最も忙しいセクションの一つである。そこには３台のコンピューターと数種類のソフト、タイプライターが１台、語学学習用のテープが備えてある学習室、写真現像室がある。プリンターが２台あり、レーザープリンターは有料で、コピー１枚ごとに５ペンス（約８円）、ドット式のプリンターは無料である。ERCは登録者のみが利用することができ、登録料は無料であるが、失業者と女性が優先的に利用できる。ただ、学生に対してはあまり積極的に勧めてはいないということである。現在の登録者数は、1993年４月の977人から12,278人に増加した。メンバーの50％以上は黒人である。また46％は失業者である。おおむね７割程度の人が履歴書や仕事の申請書の作成に利用している。

このセンターを運営しているロバートさんは、オープン・ラーニングセンターを発展させることが今後の図書館の活性化には欠かせないだろうと語ってくれた。コンピューターオンラインは、今後印刷に代わって情報分野の主役になりつつあるので、公立図書館もその流れに乗り遅れないようにしなければならないと考えている。このための区の予算の大半は主に個人指導型のソフトのアップグレードに使われており、これはたいへん利用者の満足度の高いサービスであるということである。

オープン・ラーニングは、利用者の情報技術の向上のために、雇用省が支援しているプ

ログラムであるが、今までのところ期待されているほど多くの人が利用しているわけではないということである。

表5　ルイシャム区の公立図書館データ

図書館名	貸出数（千冊）1992-3	1991-2	貸出数前年度対比(%)	貸出数比率(%)	蔵書比率(%)	登録者比率(%)
Lewisham	240	245	0.98	13.7	14.6	16.0
Blackheath	73	73	1.00	4.2	4.0	4.5
Catford	306	264	1.16	17.5	12.4	17.3
Crofton PK	106	99	1.07	6.1	6.2	5.9
Wavelengths	231	200	1.16	13.3	12.3	11.9
Downham	105	113	0.93	6.0	7.7	4.6
Forest Hill	181	160	1.13	10.4	8.6	9.4
Grove PK	45	46	0.98	2.6	4.9	4.7
Monor House	108	112	0.96	6.2	5.4	6.0
New Cross	78	39	2.00	4.5	5.3	3.5
St Catherrine	32	35	0.91	1.8	3.7	2.4
Stanstead Rd	38	26	1.46	2.2	2.9	2.3
Sydenham	96	96	1.00	5.5	6.0	5.3
Torridon	96	96	1.00	6.0	6.0	6.2
区　　計	1,735	1,604	1.08	-	-	-

＊蔵書数 516,800　　登録者数 91,958

（注）　登録者数91,958人はルイシャム区の人口の約40%に相当し、その内訳は男性－42%、女性－58%、13歳未満－24%、13歳～60歳－65%、61歳以上－11%である。

（出典）ルイシャム区の統計資料

写真２
ウエイブレングス図書館はプールをもった複合レジャー施設の一角にある

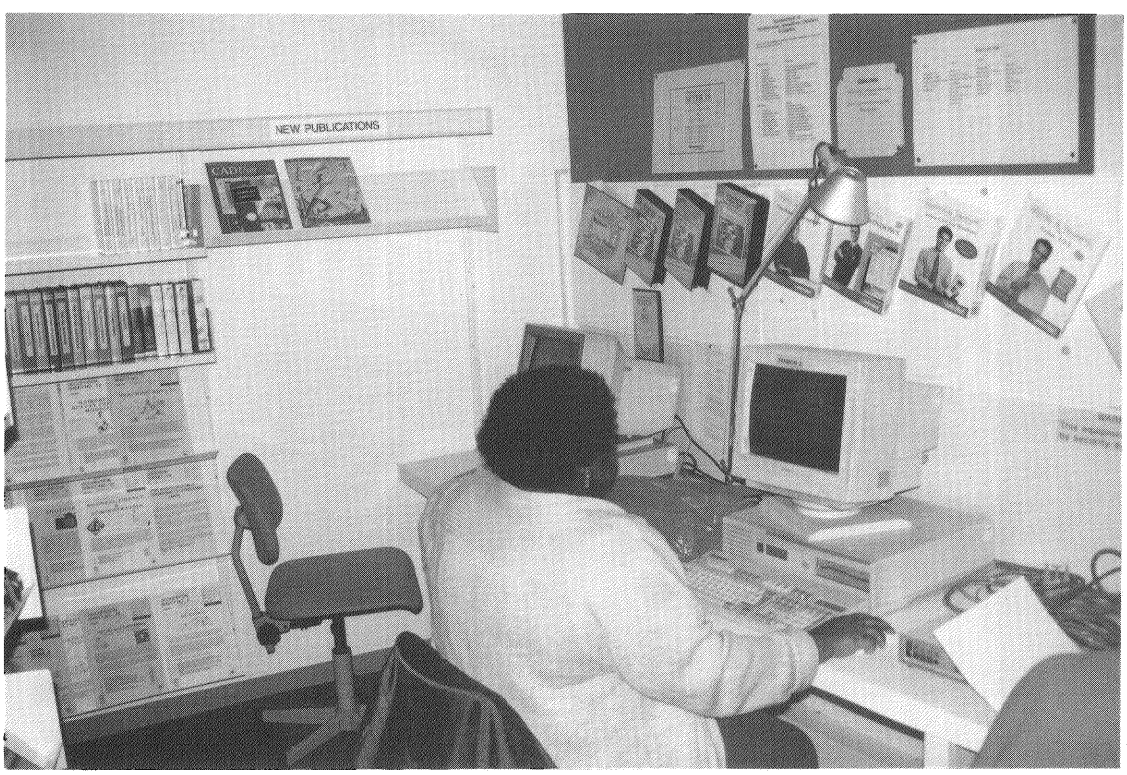


写真３
雇用資源センターでは各種のソフトが無料で使える

写真４
ウエイブレングス図書館を訪れる利用者の約45％は黒人である
黒人関係のコーナーはたいへん人気がある

写真５
新しい中央図書館はブリティシュ・テレコムから買い取った商店街に近い敷地に建てられた

2　ワンズワース区の図書館　－　図書館サービスを希望する全ての人に　－

○ワンズワース区の図書館の概要

ロンドンの区の一つであるワンズワース(Wandsworth)区は、人口約26万人、面積3,491ヘクタール、典型的なロンドン郊外の居住区である。同区は伝統的に保守党が政権を担当しており、新しい試みに積極的にチャレンジしているということである。同区には、いわゆる中央図書館というものがない。３つの大きい図書館と９つの中小の図書館が区内に点在し、３つの大きい図書館（バラム、バターシー、パットニー）には本とは別にミュージック・ライブラリー（ＣＤやレコードなどの音楽ソースを貸し出している図書館）が併設されている。区内の図書館には100万冊以上の本の他に、1,100の語学コースや15,000の音楽カセットテープ、4,000のカセットテープの本、4,000のビデオ、12,000のＣＤがあり区民にサービスされている。また、コピー機やＦＡＸが有料で使用できる。図書館によっては歴史資料館や売店を併設したり、その他絵画等の展示会、子供を対象としたお話会などのイベント、古本のセール等が行われ、会議室、タイプライター、コンピューターも借りることができる。図書館は、区内に住んでいる人、区内で仕事、勉強している人であれば誰でも無料で本を借りることができる。

○パットニー図書館

パットニー図書館はロンドンの南西部郊外、ロンドンの中心部からは地下鉄に乗っておよそ30分、下車駅から賑やかな商店街を10分程歩いたところにある。商店街の中心部、英国でよく見かける“買い物袋さげて図書館へ”型の図書館で、区内では２番目に来館者が多い。　図書館の周りは交通量が多く、車での来館は殆ど出来ないように思われる。図書館の建物は1899年に建てられたビクトリア調の美しい建物で、出版業者であるジョージ・ニューンという人の寄付によって建てられた。1970年に増築された部分は子供図書館と音楽図書館になっている。1995年の６月頃にはこの部分を取り壊し、翌年には70席の学習室をもったモダンな建物に生まれ変わる予定である。その後はワンズワース区の中で最も来館者の多い図書館になるであろうということであった。それに合わせて、今併設の地域歴史博物館は別の場所に移される。　現在、パットニー図書館管轄区内の住民数は約38,000人、図書館への登録者は約21,000人である。ＣＤなどを含めて３７万アイテムが貸し出され、85,000冊の蔵書がある。また区内の12の図書館は電話回線を使ったオンラインのコンピューターで結ばれており、“Ｅメール”というシステムを使って本の貸出状況などを照会できる。来館者が読みたいと思う本をこの図書館で見つけることができなかった場合は、まず区内の他の図書館に照会することになるが、それでも見つからない場合は近隣のバラ（区）やカウンティ（県）に照会するか、LASER（これは図書館協力ネットワーク組織

で、各図書館設置団体が、受けるサービスに応じて負担金を支払っている。）に依頼して毎日１回車で配達してもらう。それでも見つからない場合は大英図書館の組織の一部で、ヨークシャーにあるBritish Library Document Supply Centreに照会する。1994年度中にはCD-ROMを使ったデーターベースによる図書館リサーチ・ネットワークを区内に導入するということである。

写真６　生活に関する様々な情報がある掲示板（パットニー図書館）

表6．パットニー図書館のサービス活動の現況

管轄内人口	３８，０００人		
登録者数	２１，０００人	（管轄内人口に対し５５.3%の登録率）	
蔵書　＊（　）内は貸出中のアイテム数及びパーセント			
・大人			
フィクション	１４，４４６	（５，４３６	３７.６%）
ノンフィクション	３４，０８９	（７，７９６	２２.９%）
参考図書	９００		
カセット	６８０	（　２５１	３６.９%）
ビデオ	１，６２０	（　３８９	２４.０%）
計	５１，７３５	（１３，８７２	２６.８%）
・子供			
フィクション	１３，８４６	（５，２５５	３７.９%）
ノンフィクション	７，９３８	（１，７９２	２２.６%）
参考図書	３５４		
カセット	３１７	（　９２	２９.０%）
計	２２，４７３	（７，１３９	３１.８%）
・音楽			
楽譜	２，２５３	（　２７５	１２.２%）
ＣＤ	４，５８１	（　８３１	１８.１%）
レコード	２，５２１	（　１５５	６.１%）
カセット	１，７９２	（　３８０	２１.２%）
計	１１，１４７	（１，６４１	１４.７%）
ストックの総計	８５，３５５	（２２，６７７	２６.６%）
年間貸出数			
・大人			
本	２２６，８０３		
カセット	１４，７１５		
ビデオ	１３，３１５		
計	２５４，８３３		
・子供			
本	９９，５０９		
・音楽			
ＣＤ	１１，９１１		
レコード・カセット	７，７２２		
計	１９，６３３		
貸出の総計	３７３，９７５		
年間来館者	３７７，８０１		
年間収入	６９，８００ポンド （約１，１２０万円、但し　£１＝１６０円で換算）		

（出典：パットニー図書館から提供された統計－１９９４年３月より）

＊＊――＊＊

1964年の英国の図書館法によれば、図書館を設置する自治体は、「図書館のサービスの利用を希望するすべての者に、包括的かつ効率的な図書館サービスを提供し、そのために必要な職員を雇用し、必要な建物、設備、図書その他の資料を備え、維持し、その他必要な措置をとる責務を有する」（第７条）とある。その点、英国の図書館サービスは実に忠実にこれを実行している。

私は図書館と高齢者、心身障害者、刑務所収容者など直接図書館に行きたくても行けない人達に、一般の人と同様な図書館サービスを自治体がいかにして提供しているか、それを見るために、ワンズワース区の移動図書館サービス・病院サービス・刑務所サービスの担当者であるバーネット女史に会いに行った。

＊＊――＊＊

○移動（自動車）図書館サービス

ワンズワース区内には、24カ所の移動図書館のためのサービスポイントがある（そのうち18カ所は高齢者の家で、６カ所は学校である）。大量貸出しを行っているのはシェルターハウス（高齢者用住宅）、デイセンターなど62か所にのぼる。自宅に直接配達するハウスバウンドサービスには785人が登録している（うち66人はアフリカ、カリブ系で、94人はインド・パキスタン系の高齢者）。移動図書館は区内の子供や高齢者、失業者、車のない人などを対象にしている。利用者の内訳は16歳以下の子供16.2％、60歳以上の高齢者18％、失業者11.5％、車のない人44％である。区内で65歳以上の人口は約35,000人で、区全体の人口の13.9％を占めている。この内20％程度が身障者か寝たきりであると仮定すれば、潜在的には区内に約7,000人がハウスバウンドサービスを受ける資格があると考えられる。車は２種類、移動図書館用にフォードのカーゴが２台（１台は予備車）あり、１台に3,500冊を積むことができる。家庭や施設への配達用に３台のスズキのバンが配備されている。担当職員は３人の助手兼運転手、２人のハウスバウンドサービス担当司書、そして２人の非常勤の多文化ハウスバウンドサービス担当司書（各々週17時間）である。移動図書館の1993-94年の貸出し数は120,875件である。

○刑務所へのサービス

区では区内にあるワンズワース刑務所へ図書サービスを行っている。1851年にオープンしたこの刑務所には、現在約1,000人の囚人が収監されている。図書館（規模的に図書室といったほうが正しいかもしれないので以下、図書室とする）はＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅの５つの棟からなる施設内に３か所、別のＧ・Ｈ・Ｋ棟に１つが設置されており、通常収監者の助手３人によって運営されている。区の職員としては、非常勤（パートタイマー）の司

書６人が勤務している。彼らの賃金は区が支払うが、英国内務省から区に対して人頭補助金（収監者の人数をもとに支払われる補助金）が交付される。本などは内務省の予算で購入する。刑務所の中はどの棟へ行くにも、どの部屋に行くにも、鍵が必要である。建物は地上３階、地下１階の４階建て、刑期の異なる収監者が各棟にそれぞれ分かれて収容されている。食堂などで一同に食事をするといった収監者全員が一同に会する機会がなく、他の棟への移動が制限されているため図書室の数が多いということである。収監者たちは卓球をして楽しんでいたが、ここはレクレーション施設があまり充実しておらず、その結果、図書室の利用率が高いということである。刑務所全体での本などのストックは約25,000、種類としてはノン・フィクション、アフリカ・カリブ系やインド・パキスタン系に関する本、スポーツ、フィクション（ホラー、スリラーなど）、カセットブック、音楽カセットテープ、ジグソーパズルなどである。中には「はじめにセントラルパーク」「地球より永遠に」「僕の村が消える」などの日本語の翻訳本もあった。これらは収監者の家族などからの寄付だということである。図書室のドアには"Everyone needs library.（誰もが図書館を必要としている）"の貼り紙があり、地方自治体の図書館サービス範囲の広さに感心した。

○精神病院へのサービス

区内にあるスプリングフィールド精神病院は1841年以来の歴史をもち、病床数511、そのうち140はリハビリテーションなどの長期の入院患者用である。現在約400人の患者がいる。アフリカ系やカリブ系黒人、インド・パキスタン系アジア人、アイルランド人など、患者の人種は様々である。病院の一角の余り広くはない図書室に区のスプリングフィールド精神病院担当の司書であるジーンさんがおり、いろいろと説明してもらうことができた。彼女は週20時間、月曜から金曜までの午前10時～午後２時まで勤務している。ここには現在約4,300冊の本があり、１日に大体50人から60人の患者が図書室を利用するそうである。本は区が供給しているが、部屋、書棚などは病院の所有するものである。ファンタジーのようなフィクション、精神病、犯罪、心理学、宗教といったノンフィクション、黒人に関する資料等が置かれている。患者の中には、麻薬の影響などで集中して本を読むことが出来ない人も多く、そのためカセットブックの人気が高い。新聞も重要かつ人気のある読み物である。各病棟には新聞が１紙しかなく、これが患者に不評である。図書室には５つの日刊紙と１つの地方紙、その他の雑誌をおいて患者に楽しんでもらっている、ということであった。患者たちは病棟では常に病気と面と向かっていなければならず、ジーンさんはこの図書室をなるべく、リラックスした雰囲気にしたいと考えている。そうすることが患者の精神の安定に役立つと考えているからである。実際、私が訪問したときも何人かの患者が気さくに話しかけてくれて、非常に明るい雰囲気だった。ランチタイムには、月１回程度音楽会などのイベントが計画されている。

ここにもやはり解決されなければならない問題がある。第一は予算の問題であろう。それと職員の数が足りないことである。近年、コミュニティ・ケア政策のために、精神病患者の多くは病院に長く留まることを認められず、地域社会に返されている。しかし、彼らが例えば一般の図書館に行っても、手が震えるなどの症状を見て、一般の利用者から快く思われないこともあるそうである。また、彼らに必要なカセット文庫、字幕付きのビデオテープなどもまだ十分ではない。「いったん地域へ帰った患者がこの図書室へやって来て、精神的に寛げる場所にしたい。そのためにも、もっと広いスペースと充実したストックが欲しい。さらにもっと職員がいれば、地域に帰った患者への図書サービスを充実させることができる」とジーンさんは語ってくれた。コミュニティ・ケア政策は英国で生まれたのであるが、図書館サービスにこのような形で係わっているとは意外な発見だった。

写真７　住宅地の一角にあるワンズワース刑務所

3　ブレント（Brent）区におけるCCTの実験
－　入札にかけられる図書館運営　－

○ブレント区の概要

ブレント区はロンドンの北西に位置するロンドン区の一つである。人口は約25万人。人口の約40％を黒人、アジア人で占め、また10人に１人はアイルランド系の住民である。この日私たちに説明をしてくれた区の芸術・図書館部門の担当のカレン・ティアマン女史によると、この区は“マルチカルチャー区”なのだそうである。保守党支配の区で、議員66人のうち、33人が保守党、28人が労働党、５人が自由民主党である。

区内には12の図書館があり、そのうちウィレスデン・グリーン図書館とタウンホール図書館は、レファレンス図書館として特に規模の大きい図書館である。

英国の全国紙「ガーディアン」に掲載されたショッキングな広告（図２参照）を見て、ここを訪問することにした。

○強制競争－CCT（Compulsory Competitive Tendering）とは？

英国の地方自治体を訪問すると、必ずといっていいほどこの言葉に遭遇する。CCTとは「法律・規則で定められた特定の公共サービス（建設・道路工事、ごみ収集、清掃、給食サービスなど）を、地方団体が雇用する職員によって自ら実施したいと希望する場合には、定められた手続きによる競争入札を行い、民間部門との競争を経なければ、その権利を獲得できない」というものである。これは1980年の「地方自治体の計画と土地に関する法律」によって道路関係の業務一般（現業部門）に始めて導入されたのであるが、その後1988年の「地方自治法」で適用範囲が飛躍的に拡大され、ごみ収集、学校・福祉施設等の給食サービス、スポーツ・レジャー施設のマネジメントなども含まれるようになった。手続きとしては「少なくとも１つの地方紙及び１つの業界紙に入札の実施などについて広告すること」など幾つかのステップがあり、また自治体の直接現業部門が落札した場合には、経費の５％の収益をあげなければならない（民間企業にはこの制約はない）。　日本の競争入札との違いは、入札を行うかどうかは地方団体の任意ではなく義務であること、地方団体は契約の委託者であるのと同時に競争の主体であり、受託者ともなりうることである。

○図書館サービス入札の背景

ブレント区の図書館では、３～４年前までは区の図書館サービスに問題があった。例えば多くの本が紛失したり、返ってこなかったりしして多くの本を新たに購入しなければならなかったり、またそのような問題に対して適切なチェックができていない状態だった。

そこで、ブレント区は1991年に「トータル・クオリティ・プログラム」を策定し、区のサービスの向上を図ろうとした。その指針に沿って図書館のサービスについても次の３つの分野での見直しを行うことを決めた。□財政的な見直し□コンピューターシステムの見直し□マネッジメントの見直し（クライアント・コントラクター概念の導入、つまりここでサービスの供給者と受益者という機能の分化）の３つである。

1993年６月、英国ナショナル・ヘリティジ省は地方団体への市場原理導入の適用範囲拡大政策の一環として、図書館サービスの民営化の実行可能性を探るためにパイレットプロジェクトをつくり、KPMG．CPIというコンサルタント機関に調査を行わせた。それに対し、自治体はこの実験プログラムが「強制」ではなく「任意」であることを要請した。そしてブレント区は他の４つの自治体（ケント県、ドーセット県、ヘリフォード＆ウスター県、ハートフォード県）と共にこの実験に参加することを決め、任意競争入札(Volunterly Competetive Tendering)」を行ったのである。

○任意競争入札の課程

区の図書館サービス部門では入札に向けての準備を行った。1991年以来の区の「トータル・クオリティ・プログラム」の流れの中で、「図書館で何をすべきか」「なぜそうすべきか」「どのようなサービスをどのように行うのか」を徹底的に考え、サービスを明確化し、その評価基準づくりを行った。また、図書館利用者へのアンケート、職員研修、ニューズレター発行、セミナーの開催、チームブリーフィングなどを行った。区内の12の図書館を２カ所づつ６つの“ビジネス・ユニット”として組織し、それぞれにマネジャーを配し、入札に勝つために、住民のニーズに十分応えかつ効率的なサービスを目指して競争させた。もし自分たちのチーム（In-house team)が勝てば、よりよいサービスを提供できることを証明できるからである。そして区は６つのビジネス・ユニットの中からプレストン図書館とキングスベリー図書館チームを区の代表選手として送りだすことに決定した。

決定の主な理由は以下のとおりである。

1　マネジャー、スタッフに熱意があったこと
2　利用者が多く、民間企業にも魅力があると考えられたこと
3　いきなり区の最大の図書館に適用するにはリスクが大きいと考えられたこと
4　実験なので、典型的な図書館が都合がよかったこと

この実験は、図書館サービスが強制競争入札になじむものかどうかを判断するものであるので、その手続きはできるだけ強制競争入札の法的手続きに従った。また、他の欧州連合加盟国の入札者と差別をしてはならないというEU（欧州連合）指令にも従った。そして1994年４月、区はCCTの広告規定に従って、新聞、国内の業界紙、EUの業界紙に広告を出した。区でターゲットとしていたのは手広くレジャー産業を手掛けている会社、ビル

管理会社、出版社、コンピューター関連の会社などであった。その結果、400件以上の問い合わせがあったが、大半は他の自治体からであった。それでも15の企業から照会があった。EU諸国からはアイルランド、オランダ、スイスから問い合わせがあったが、いずれも自治体からであった。申請書の送付、企画仕様書についての説明、コストについての説明など、区の専門官が提出されたサービスに関する質、コストを評価した結果、僅差ではあったが、15%の開館時間の延長やビデオ・ワープロの貸出し、CDクラブ・ホームワーククラブそして玩具の貸出しなどの斬新なアイデアを出した、区の芸術・図書館部のハウスバウンドチームが勝ち、1994年9月に契約を獲得した。これによって区としても貸出し数や来館者の増加が期待できるし、5年間にわたる契約期間中に、この2つの図書館に対しては6%のコスト削減、さらに他の5つのユニットのプロジェクトが進めば、サービスの質と範囲の向上と共に100万ポンド（約1億6千万円）の経費削減を見込んでいる。

一方、この競争入札によるコントラクトアウト（外部委託）について懸念されることはなんですか？と聞いたところ、カレンさんは従来あった図書館の相互貸出のネットワークがうまく機能しなくなること、サービスの内容が契約ごとにばらばらになる可能性があること、労働環境の低下、入札のためにかなりの時間と労力を要すること、などをあげてくれた。

○ブレント区のまとめ

CCTばやりである。この言葉は一種の流行語になった感がある。政府は市民に対しては「サービスの効率化と自治体の歳出の削減」を大義名分に地方自治体を徹底的にスリム化しようとしている。道路関係の業務に始まって、ごみ収集、給食サービス住宅に至り、将来財政、人事から図書館などの文化サービスにまでCCTの適用範囲が広がりつつある。確かに効率性、コストの面で一定の成果があるのかもしれない。しかし行政には必ずしもこのような尺度で図れないものがあることも事実である。今後はCCTと行政サービスとのバランスをいかにとるか、ということが大事になってくるだろう。いずれにしろ、今回、図書館サービスに対するCCTの実行可能性を試す初の実験が行われたのである。英国における公立図書館のみならず、自治体の将来を考えるうえで大変興味深い事例である。

図２．関係者に衝撃を与えた新聞広告

写真８　「競争入札によって外部委託することになったプレストン図書館

〔参考〕－公立図書館と関連のある団体－

公立図書館以外に、英国には図書に関連するさまざまな団体がある。以下にこれらの団体について紹介する。

（１）本によって海外援助を行うボランティア団体－Book Aid International（BAI）

英国ではボランティア活動が盛んであることはよく知られている。ここで紹介する組織は公立図書館ではないが、公立図書館と協力しながら、また独自にアフリカなどの開発途上国に対する援助を行っているBook Aid Internationalというボランティア団体である。この団体は開発途上国に対する援助を40年近く行っており、緊急の要請に応じて年間50万冊以上の本を海外に送っているチャリティ団体である。毎年、一般の市民やボランティア団体、教育機関、図書館、出版社などから150万冊以上が寄付されている。ロータリークラブが英国中から本を集め、団体の司書が本が適当か、状態はどうかをチェックする。もし不適当な本があれば、売られるかリサイクルに回される。寄付で集まらない種類の本は基金によって購入する。また現地における本の出版の手助けをするのも重要な業務である。

具体的な活動例としては、次のようなものがある。

・アフリカのルワンダにはエイズにより両親を失った多くの孤児がいる。ルワンダでもっも大きいカンパラ（Kampala)ナーサリー・デイケアセンターでは、１歳から５歳までの300人のエイズである子供たちに食料を与えるなどの活動をしているが、Book AidInternational ではこのセンターに絵本を送っている。

・開発途上国における難民問題は広がっており、難民たちはしばしば精神的にショックを受けたり、疎外されたりして学習することが困難な状況にある。BAIは南インドにおけるチベット難民のためのセラジュ学校（Sera Je School）の図書館に本を援助している。この学校では７歳から19歳の280人の難民に対し無料のケアと教育を施している。

BAIは、この他にも様々な形で世界各国に対して本を通じた国際援助を行っている。地域的な内訳は、南アメリカとカリブに５％、アフリカサハラ砂漠以南の国々に82％、中東及び北アフリカに１％、東ヨーロッパに２％、中・南アジアに５％、東南アジアに５％である。また本を受け取る施設としては、1993年の統計では、国立及び公立図書館が33％、高等教育機関に32％、小学校に５％、中学校に23％の割合となっている。

〔参考〕Book Aid International

39-41 Coldharbour Lane Camberwell London SE5 9NR

（２）図書館協会（The Library Association)

英国の図書館協会は1877年に設立され、英国内の司書と情報専門家のための公認の職業団体である。会員は約２万５千人で、英国内の16の司書課程と情報科学課程を承認している。このようなコースを終了して、ある一定期間の図書館での実習を終えれば、図書館協会公認会員(Chartered Members of the Library Association)と呼ばれ、ALA若しくはFLA（Associate or Fellow of the Library Association) の肩書を持つことになる。この協会は図書館関係のガイドラインづくりや他の国の同様な団体との協力関係促進などを行っている。

[The Library Association : 7 Ridgemount St,London,WC1E 7AE]

（３）国立図書館

ブリティシュ・ライブラリは英国の国立図書館であり、芸術や科学の分野で世界をリードするレファレンス図書館である。この図書館は1972年英国図書館法(The British Library Act 1972) によって、1973年７月１に設立された（最も古いコレクションは1753年大英博物館の基金に由来している）。この図書館の目的は、包括的なレファレンス、貸出、文書の参照、図書目録、出版、コンピューターリサーチ、そして膨大な蔵書、東西の写本、地図、音楽ソース等に基づいたその他のサービスを提供することである。1995年から新しい移転先であるSt Pancrasで読書室がオープンする予定である。

[本部 96 Euston Road, St Pancras,London,NW1 2DB (TEL:071-323-7262)]

なお、1911年の著作権法が1972年英国図書館法(The British Library Act 1972)によって改正され、ブリティシュ・ライブラリは英国内で出版される全ての本各１冊を、１か月以内に受け取ることができるようになった。また以下の図書館は、出版された本を出版社に対する書面による申請によって12か月以内に入手することができる。

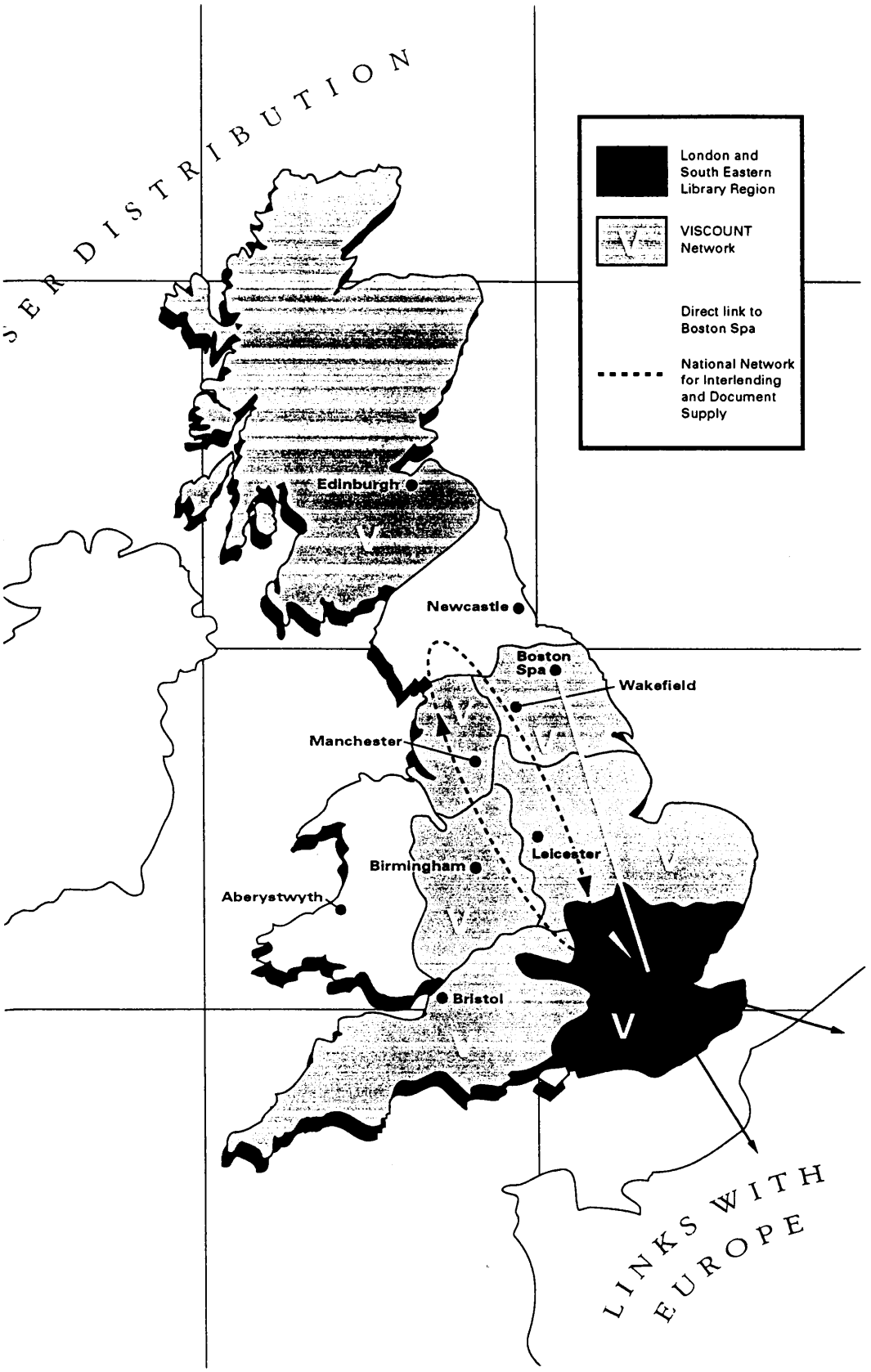
- The Bodleian Library(Oxford)
- The University Library(Cambridge)
- National Library of Wales
- National Library of Scotland
- Trinty Colledge(Dublin)

（４）レーザー／LASER(The London & South-East Resion)

英国には、全国10のブロックに分かれた地域の図書館の相互組織がある。レーザーとは、その中でロンドンを中心としたブロックの１つであり、図書館サービスを行っている様々な組織間の協力関係を促進するための組織である。メンバーは公立図書館を中心に、大学、職業学校、私立の図書館などであるが、それ以外の団体でも申込みをすれば加盟できる。近年、レーザーは、VISCOUNTと呼ばれる図書目録のデータベースを開発した。このデータベースは300万以上のタイトルと3,000万以上の関連項目にアクセスが可能で、英国国内の図書館組織とブリティシュ・ライブラリの書籍供給センターからデータを利用して構築されている。これはミニコンピューターのオンライン図書目録システムとして、レーザーが1975年から1977年にかけて構築したシステムである。
1980年代前半からは６つの地域組織がレーザーのネットワークに加わった。現在は、10のブロックのうち、７つがこのVISCOUNTを利用している。1933年からはオランダやフランスのネットともリンクしており、更には北アメリカのデータベースとの接続を検討中である。

また、レーザーは書籍運送システムを持っている。書籍運送システムは、ブリティシュ・ライブラリの書籍供給センターからレーザー内の地域へ、翌日の営業日に書籍を配達するシステムである。レーザーがカバーしているのは、全ロンドン区とエセックス県、ケント県、サリー県、イースト及びウエストサセックス県、バークシャー県、ベッドフォードシャー県、バッキンガムシャー県そしてハートフォードシャー県である。このシステムはレーザーによって組織され、British Road Services Southernという組織によって運営されている。メンバー会員以外でも、10枚綴りのバウチャーを13ポンド（＋VAT）で購入すれば、これらのサービスを受けることができる。

図3．レーザーのネットワーク



（注）レーザーの図書目録データーベースは、英国の7つのエリアをカバーし、国立図書館及びフランスなどの主要な図書館とリンクしている。

＜参考文献＞

1 Public Library Statistic 1992-3 : CIPFA

2 Library in London 1993 : London Planning Advisory Committee

3 Libraries Philosophy & Practice 1992 : COMEDIA

4 Review 1994 Oct : Association of Direct Councils

5 Minicipal Year Book 1993 : Minicipal Journal Ltd

6 Public Library Journal 1994 vol9 : Public Libraries Group of the L.A

7 News Release 1994 Feb : Department of National Heritage

8 The Future of Public Library 1993 : COMEDIA

9 日本の図書館（統計と名簿）１９９４　（社）日本図書館協会

10 公立図書館の歴史と現在　森　耕一　（社）日本図書館協会

11 レジャーの社会経済史　荒井政治　東洋経済新報社

12 英国の生活と文化事典　小池　滋　他編　研究社出版

この他、ワンズワース区、ブレント区、ルイシャム区、バーミンガム市、カーディフ市、ＬＡＳＥＲ，ブリティシュ・ライブラリ、ライブラリ・アソーシエーション他、訪問・照会先からの各種資料

「CLAIR REPORT」既刊分のご案内

NO	タ　イ　ト　ル	発刊日
第９７号	英国の公立図書館	1995/ 2/28
第９６号	アメリカン・インディアン　－その過去・現在・未来－	1995/ 2/14
第９５号	ロンドンの分散(Decentralisation)政策と都市開発	1995/ 1/20
第９４号	フランスの学校教育における「日本」	1995/ 1/20
第９３号	大韓民国地方行財政の概要	1994/12/15
第９２号	シンガポールの住宅政策	1994/12/ 1
第９１号	欧州文化都市制度	1994/ 9/19
第９０号	１９９４年英国統一地方選挙と欧州議会議員選挙	1994/ 8/ 1
第８９号	英国における多民族社会の中の学校教育	1994/ 6/20
第８８号	アメリカの学校給食	1994/ 6/20
第８７号	現代フランス都市計画の手法（２）	1994/ 5/30
第８６号	現代フランス都市計画の手法（１）	1994/ 5/30
第８５号	フランス・アキテーヌ州の沿岸リゾート整備	1994/ 5/27
第８４号	地方公務員のための「イギリス憲法入門」	1994/ 5/23
第８３号	統一ドイツと財政調整　－連邦制財政システムは生き残れるか－	1994/ 4/15
第８２号	アイルランド　－国の仕組みと地方自治－	1994/ 3/25
第８１号	イングランドの地方団体と住宅政策	1994/ 3/15
第８０号	内側から見た英国	1994/ 3/15
第７９号	英国の地方団体構造改革の動向	1993/12/24
第７８号	英国社会保障の現状及び今後の動向	1993/10/15
第７７号	イングランドとウェールズの水道	1993/10/15
第７６号	フランスの高齢者福祉（２）	1993/ 9/30
第７５号	フランスの高齢者福祉（１）	1993/ 9/30
第７４号	英国の１９９３年統一地方選挙	1993/ 8/31
第７３号	コントラクト・シティ	1993/ 7/30
第７２号	英国における地方議員と地方行政	1993/ 7/20